都市の発展と物資の流通 （中世編）

古代の大宰府は九州を統合する場として政治、文化の中心的な役割を持っていました。前回紹介しました「都市と周辺の華やかな陶磁器」は古代の官人など一部の上層階級が持つ文化の一面を表したわけです。中世は政治の交代とともに大宰府の機能は後退していきますが、生産・交易・信仰等などから見ると新たな中世の状況に応じて変化をみせており、生活、文化の中心となったことが確かめられます。

ところで、歴史の上では中世の開始は鎌倉時代という事になっていますが、大宰府周辺の発掘からみると、都市化の新しい局面や物資の流通などの経済的活動はむしろ古代の終わり頃・平安時代末にさかのぼる事がわかってきました。そこで今回は、11世紀後半から14世紀までの平安時代末から鎌倉・南北朝時代までを見る事にしましょう。

まず、注目されるのは、中国からの輸入品である貿易陶磁器です。古代では大宰府の付属機関の一つ鴻臚館が対外交易の窓口でしたが、平安時代末には博多が国際貿易拠点となります。貿易陶磁の質は低下しますが、膨大な量が輸入され、商品として中世には広く民衆にまで行き渡った事があげられます（もちろん上質で値段の高い一流品は、まだ支配層などが獲得しているわけですが）。矢倉遺跡（筑紫野市）で出土した白磁の椀（図1）は中世を代表する陶磁の一つです。また国内の産物に注目すると、次にあげた各地の焼物がそれぞれ各地独自の量産商品として全国に運ばれます。これらは遺跡の経済力を推定する上で重要な鍵になります。

畿内東播磨産の須恵質鉢・椀・甕・壷（図2）は灰色をした堅い焼物です。とくに鉢は調理用で食物を捏ねる器ですが、当時は実用的な点から半独占的に供給されました。地方ではこれを真似た器も造られましたが、東播磨産よりも軟弱で一歩劣るものです。武蔵寺経塚（筑紫野市）では東播磨産の鉢や甕、壷が経筒を埋納する時の保護容器として、特別な宗教行為にも使用されています（図3）。東海地域の常滑産の大形甕（図4）はやはり硬質で水、酒、調味料などの貯蔵に適しており、東播磨産のものと同時代に全国的規模で流通しました。14世紀を過ぎると、この大形甕類は瀬戸内の備前焼に交代します。以上は九州以外から運ばれた商品でした。次に滑石製石鍋（図5・6）は肥前西彼杵町の特産物です。ここでは山中に石鍋工房が発見されています。大宰府各地点の遺跡では、石鍋は11～12世紀にかけて増加し生活の中に浸透しました。石鍋は遠く東北地域まで運ばれています。九州から全国へ流通した商

図1　中国の白磁・12世紀
（筑紫野市矢倉遺跡出土）

品として注目できます。

このように公の経済統制はあるにしろ、流通の面では全国的規模で動きがあり、大宰府は地域の経済都市としても存続してきたわけです。

遺跡で出土する貿易陶磁とともに国産陶器の種類や量を調べる事によって、その遺跡における生活物資の獲得力と反映ぶりが導き出されるわけです。　（山本信夫）

図２　東播磨産の鉢と甕
（武蔵寺第８号経塚出土）

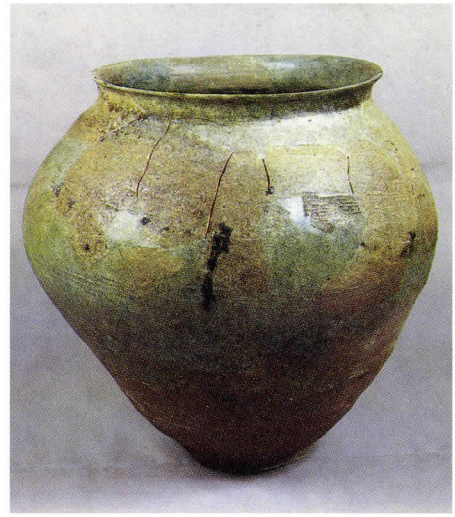

図４　常滑産の甕・12～13世紀
（太宰府市観世音寺出土）

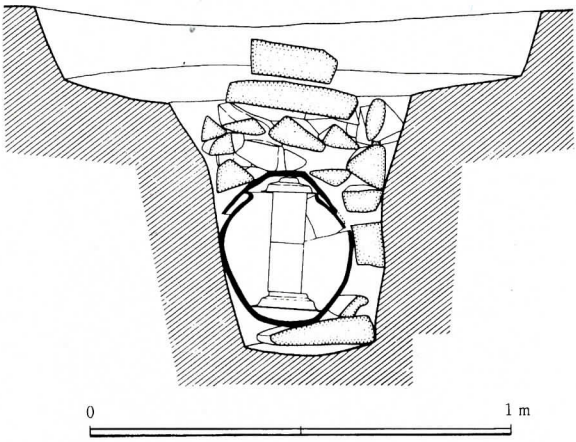

図３　武蔵寺第８号経塚

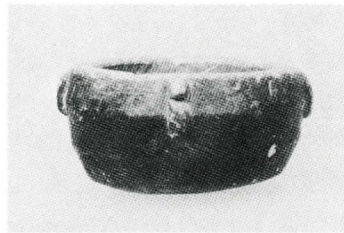

図５　石鍋・11～12世紀
（太宰府市観世音寺出土）

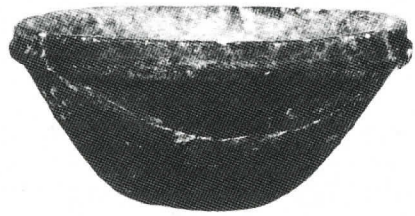

図６　石鍋・13～14世紀
（太宰府市五条出土）

参考資料
・筑紫野市教育委員会「矢倉遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第8集　昭和57（1982）
・ふるさと館ちくしの「武蔵寺と二日市温泉」筑紫野市教育委員会　平成10（1998）
・九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」昭和50（1975）
・九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」昭和53（1978）
・太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡　Ⅲ」太宰府市の文化財第8集　昭和59（1984）